

3つの政治改革と中央区 ~前篇~

5代将軍・徳川綱吉の時代(1680~1709年)は、災害の後始末や動物を極端に大切に「生類憐みの令」、質の悪い貨幣の発行などで、幕府の財政は赤字だった。武士たちが、苦しい生活を送るなか将軍となったのは、もと紀州藩(現・和歌山県)の藩主徳川吉宗だった。

<将軍吉宗登場!!>

1716(享保元)年、7代将軍家継が6歳で亡くなると、徳川吉宗が33歳で8代将軍となった。将軍となった吉宗は、倹約と規制を進めて、町人たちがぜいたくになつた世のなかを立てなおそうとした。その政治は「享保の改革」とよばれた。このあとも江戸時代には、「寛政の改革」と「天保の改革」(→p.64-65)という、幕府の財政を立てなおすための、大きな政治改革が行われた。

8代将軍・徳川吉宗(1684~1751)

1716(享保元)から1745(延享2)年まで将軍を務めた。人々は吉宗を名君(優れた君主)とたたえた。



町の人々の意見を取り入れた

1721(享保6)年、吉宗は町の人々の意見を聞くために、「目安箱」という投書箱を設置する。吉宗は自分で箱を開けて投書を読み、よい提案は実行した。たとえば、江戸を火事から守るため、屋根に板やわらではなく、燃えにくいかわらを使ったりした。



町人たちが意見を書いて入れた目安箱。

小石川養生所をモデルにした映画「赤ひげ」。

お金のない人のための病院をつくった

目安箱に入っていた提案のなかには、貧しくて十分な医りようを受けれない人々のために、無料の病院をつくるべきだという、町医者からの投書があった。その意見からつくられたのが、現在の文京区小石川植物園内にあった小石川養生所だ。ここには、約100人の病人が入院していた。

いろいろな考え方があつたのね。



芝居になつた徳川宗春(1696~1764)

名古屋の人々からしたわれた宗春だったが、吉宗と対立し妬ばつされてしまう。しかし、人々は芝居をつくらせて宗春をつかした。絵のなかで、牛に乗っているのが宗春。



もう1人の名君・徳川宗春

吉宗が享保の改革を行っていたころ、正反對の政治を行つたのが、尾張国(現・愛知県)名古屋藩主の徳川宗春だ。吉宗が社会の安定のために倹約を進め、さまざまなことを規制したのに対し、宗春は「人々の幸せは自由な生活にある」と考えた。規制をゆるめ、自由に人々の才能を発揮させた宗春の時代に、名古屋は大都会へと成長した。宗春は吉宗のライバルだったのだ。

はじめての人口調査

吉宗は1721(享保6)年に、日本初の全国的な人口調査を行った。この調査から、当時の日本の人口は約3000万人で、江戸には110~120万人が住んでいたとされている。江戸は世界でも1、2の大都市だったのだ。そのため、江戸では迷子(まご)が大きな問題だった。吉宗は芝口(現・銀座八丁目)に迷子の掲示場をつくったが、あまり効果はなかつた。

能力のある人に仕事をさせた

幕府の役所では、家禄(給与)の高い家が、親から子どもに重要な役職を引きついでいた。しかし、1723(享保8)年、吉宗は能力があれば、家禄が低くても重要な役職につかせた(足高の制)。この制度によって、大岡忠相が町奉行となり、公正な裁判や防火対策、物価の安定策などで大活躍した。

江戸の安全は任せとけ!



大岡越前守忠相(1677~1752)「越前守」は役職の名前。町奉行として、町奉行(→p.49)や小石川養生所をつくった。

食べものの安定供給に気を配った

吉宗は、一年を通じて米の値段が一定になるように気をつけた。米の値段が安定することで、物価も安定するからだ。また、天候の不順により米や農作物のできが悪く、食べるものがなくなるきんに備え、厳しい環境でも育つサツマイモ(甘藷)の栽培を進めた。

サツマイモはあれ地でも育つじゃ。今年もいいイモができたよ。



「甘藷先生」とよばれた

青木昆陽(1698~1769) 儒学者で蘭学者。白本橋小田原町の魚問屋に生まれた昆陽は、大岡越前守忠相によれば、ききん対策に、サツマイモの栽培を全国に広めようとした。サツマイモは南米原産。日本には江戸時代に中国から入ってきた。

和歌山城の近くにある徳川吉宗の像

吉宗は身長180cmを超え(当時の平均身長は157cm)、タカ狩りや乗馬が好きだった。